

問題なのであつて基本的にはへ原典以外は一切を信ぜずへが信条であるべきだろう。それほどに翻訳は本来信頼のできるものではない。

例えば翻訳語「医学」はへ学への字故にすぎへ medicine ではない。医学ではなく medicine の語を用いるにせよ、現在の medicine の概念で語ることでできる医学はせいぜいこ二一三〇〇年のことであろう。現代の日本語に翻訳するだけで意味が変化してしまうのである。

「テキスト（権威と伝統）ではなく、あなたの見たもの、あなたの触れたものを信じなさい」はヴェサリウスの言葉である。「原点に戻れ」と叫ぶヴェサリウスにたいして彼の原典ではなく、翻訳を切望するのは決して筋違いではない。それほどに第一級の古典の翻訳の意義は大きいのである。本来不信頼とはいえ、翻訳からでも得ることは実に大きい。

早速、ヴェサリウス『人体構造論抄』を購入して拝読させていただいた。近藤氏の批判もあるが、それにもかかわらずその点を補つて余りある意義があるのではないか。挿し絵の紹介だけでもありがたいが、一六世紀の第一級の医学古典が読める形で書店に電話注文で手に取ることができるのである。訳文があるおかげで図版から想像する以上にヴェサリウスが具体的かつ詳細に観察し記述しているのが判る。一方で、当時においてさえヴェサリウスだけが近代医学への転換点を作つたのではなからう。ヴェサリウスを誕生させた時代、伝統と権威から如何に脱却を計ろうともヴェサリウスですすらも

が呪縛されてしまう時代が現れているのも窺えよう。「The Epitome」自体が医学史の専門書であるばかりか、格好の医学史入門書そのものでもある。

こうなれば『Fabrica』の翻訳が欲しくなる。このような出版を機縁にして我国においても「ヴェサリウス論議」が展開され、近代医学への転換期の解釈に一層の深みが増せば良いと思う。またこのようなことも今回の出版の期待したい意義の一つであろう。訳者も出版社も萎縮しないで、これを機会に古典の紹介が相次いで欲しいものだ。

（永田 和弘）

永富獨嘯庵二三〇回忌追善祭（報告）

平成七年三月二十一日彼岸中日、大阪市天王寺区上之宮町、曹洞宗、藏鷲庵に於て

参列者は、東京より寺師睦宗、同碩甫、西巻明彦、小曾戸明子、名古屋より長与健夫、中村新三、京都より宗田一、杉立義一、小石秀夫、石原理年、渡辺武、地元大阪より裏辻嘉行、柏原紀美、岡村純、松岡道治、山中太木、長門谷洋治、苅込明、南利雄、永井達夫、山田政弥、御坊市より池田曠播氏



永富獨嘯庵墓前にて

など、計四十名出席。

一、本堂及び墓前にて法要、導師、住職 磯田芳竜師

二、会食 挨拶 獨嘯庵頭彰会事務局

三、記念講演会（司会、裏辻嘉行、長門谷洋治、岡村芳樹）

渡辺武先生 「獨嘯庵の吐方について」

宗田一先生 「獨嘯庵の出版書誌」

寺師睦宗先生 「永富獨嘯庵」

四、懇親会

永富家子孫謝辞、中嶋哲夫、井上喜郎、幸子夫妻、小

石秀夫、長与健夫氏以下順次挨拶

（今春、葺鷺庵本堂に「獨嘯庵文庫」を設立しました。獨嘯庵に関する資料を御寄贈お願い申し上げます。）

（獨嘯庵頭彰会事務局 岡村芳樹）

日本医史学会関西支部一九九五（平成七）年春季大会

共催 京都医学史研究会

とき 一九九五年五月二十八日（日）午前九時半から

ところ 京大会館（京都市左京区吉田河原町一五一九）

開会のことば……………長門谷洋治

一、クリニカル・サイエンス（T・ルイス、一九三〇年代）

栗本 宗治（大阪医大）

二、島村俊一先生の事跡

藤田 俊夫（京都市）

三、江戸のオランダ正月二〇〇年

宗田 一（京都市）

四、二、三〇回追善祭と獨嘯庵を廻る人々

五、〔紙上発表〕『漫遊雜記』にみる毒の用語について 岡村 芳樹（大阪市）

六、高原滋夫先生について 小曾戸明子（東京市）

七、丹波の種痘医 松本節斎とその一族 江川 義雄（廿日市市）

八、ハンガリーの医薬博物館 古西 義麿（大阪市立）

九、Otto Friderich Müllerの欧州遍歴旅行 石田 純郎（新見女子短大）

一〇、緒方三平の『医薬品術語集』（適塾蔵）について 安田 純一（西宮市）

一一、酒田の『解体約図』—池田貞三文庫図書目録紹介をかかて— 岩治 勇一（大野市）

一二、長崎逢洲の年譜について 佐藤 允男（山形県）

一三、野口英世の在米初期の友人 児玉信嘉 正橋 剛二（富山市）

一四、色盲の歴史 石原 理年（長岡京市）

一五、新収藏品「ウルユス」について 奥沢 康正（京都市）

特別講演 藤原定家と冷泉家 岩井敏治郎（内藤記念くすり博物館）

同志社女子大学教授 隴谷 壽

閉会のことば……………杉立 義一

（長門谷洋治）